

主体変化動詞が重複形になる場合

近 藤 明

On Reduplication of Mutative Verb in Japanese

Akira KONDOH

一 はじめに

本稿で動詞の重複形と称するのは、玉村(一九八五)に言う

「…シナガラ」「…シツツ」「…スル一方デ」のように、動作の継続・反復を表しながら、その動作が後続の動詞によって示される動作と同時的・並行的に行われることを示す。(p

四一)

という性質を持つもので、「ナクナク」のような終止形重複形と、「ナキナキ」のような連用形重複形とがある。

なお、歌の末尾に位置するものは「後続の動詞」がないことになるが、「…ツツ」にいわゆる「つつ止め」があるのと同様と見なして、動詞重複形に加えることとする。また後続の動詞が「ス」で、全体として複合サ変動詞のようになっているものも加えて考えることとする。

この重複形へのなりやすさ・なりにくさ、重複形になった場合の意味は、動詞によって異なるところがあり、またそれには時代的な相違もあるようである。本稿では、主に主体の変化を表す動

詞について、右の点について考察しようとするものであるが、更に、主体変化動詞を含めた「限界動詞」が重複形になった場合に、金水(一九九五)のいう「強進行態」を表し得るか否かについて知りたいという考えもある。

動詞重複形の意味については前掲の玉村(一九八五)のように「動作の継続・反復」という言い方がされることが多いが、本稿では動詞重複形の意味を次の四つに分けて考えることにする。

「進行」…動作・変化が開始した後で、終了・完成する前の局面が持続すること。(玉村の言う「動作の継続」もこれに含まれよう)

「反復」…動作・変化が(終了・完結しつつ)多回的・断続的になされること。

「多数」…動作・変化の主体または対象(これは他動詞の場合だが)が多数であること。その場合、動作・変化はおおむね多回的になるから、「反復」と截然と区別したいことも少なくない(一応、多回的であつてもそれが主体や客体の多数性に基づくことが明確なものは、こちらに分類することにするが)。そのた

め「反復」「多数」といった並列的な言い方をする
こともある。

「結果状態」…変化の結果としての状態が、持続すること。

右の四つの中の「進行」の意に解されるものがあつた場合、主体変化動詞は、運動が必然的に尽きる内的な時間的限界を有する「限界動詞」に属するとされるので、それは金水（一九九五）に言うところの「強進行態」に当たることになる。

二 現代語の場合

歴史的な考察に先立つて、まず現代語での状況を押さえておくことにする。動詞重複形のうち、現代共通語で生産性を有するのは連用形重複形である。主体変化動詞が連用形重複形になつた例としては、玉村（一九八五）に掲げられている

① 生きかわり生きかわりたたき直さなくてはならないのだそうである。
（幸田文『こんなこと』経師）

のようなものがある。ただし「イキカワリイキカワリ」や「イレカワリイレカワリ」は可能でも、「*カワリカワリ」は考えにくい。また「キエノコリキエノコリ」「タチドマリタチドマリ」は可能だろうが、「*キエキエ」「*ノコリノコリ」「*トマリトマリ」もかなり考えにくい。

主体変化動詞の中でも単純動詞もしくは語形の短い動詞は重複形になることが困難と言えそうである。——物によっては「ゝスル」と複合して複合サ変動詞変化した場合は許容度が高まるようだが

——これは動作動詞にはあまり見られない制約ではないかと思う（これ以外にも主体変化動詞の中の制約はありそうに思われるが、現段階では明確でない）。

もう一つ把握しておきたいのが、主体変化動詞が重複形になつ

た場合の意味である。①の「イキカワリイキカワリ」は「反復」と見てよい。「イレカワリイレカワリ」「タチドマリタチドマリ」「キエノコリキエノコリ」なども、用例を想定すると「反復」か「多数」の意になりそうである。

一方、主体変化動詞の連用形重複形で、「進行」「結果状態」の意を表すものは想定しにくいように思う（ただし後に述べるように、時代を溯ると「結果状態」の意の例はある）。特に、後者の「進行」の意にはならないということが言えるとすれば、主体変化動詞は、現代において重複形（実質上は連用形重複形）で「強進行態」を表すことはないということになる。⁽¹⁾

なお

② 「こんどのもまた女学校出え出えのたまごじゃいよつたぞ」
（壺井栄 『二十四の瞳』新潮文庫 p.七）

③ （炎天下、鉄骨から降りられない状況になり）「モウ、アカンカイ？」「ああ、もう、こらア、死に死にや」
（開高健 『日本三文オペラ』新潮文庫 p.一五九）

のようなものがあるが、これは「ゝヤ（共通語なら「ゞダ」に相当しよう）」「ゝノ」という形で使われており、形容動詞語幹や名詞に近い性質を持つているようで、本稿で扱う動詞重複形には含まれない。⁽²⁾「デエデエ（出）」は「出た（卒業した）ばかり」という「直後」の意を、「シニシニ（死）」は「今にも死にそう」という「直前」の意を表しているかと思われるが、これらは現代では（おそらくは西日本方面の）方言的色彩を帯びたもののように思う。ちなみに壺井栄は小豆島、開高健は大阪市出身である。

また終止形を重ねた形を持つ「カハルガハル（こ）」もあるが、これは副詞として固定化していると見て、やはり本稿で言う動詞重複形からは除外しておく。

三 主体変化動詞の終止形重複形

まず歴史的により古いと見られる終止形重複形から検討していく。以下の論においては、該当する用例の抽出に関して、蜂矢(一九九八)をはじめ、先行の諸論の恩恵をこうむっている。「カハルガハル」「カヘルガヘル」などの類は、蜂矢(一九九八)で「重複副詞(時空数量)」として、別項を立てて扱っているのに従い、本稿でいう終止形重複形の中には加えないことにする。また蜂矢(一九九八)では、後撰集に見られる「シヌシヌ」を終止形重複形の例として扱っているが、これは一語文「死ぬ」の繰り返されたものと見て、やはり終止形重複形からは除外することにする。

日野(一九九六)に、中古においては終止形重複形になり得る動詞は、金田一春彦の言う「継続動詞」のみであるとの指摘がある。これは言い方を変えろと、金田一の「瞬間動詞」(属する動詞の内訳は「主体変化動詞」にほぼ相当する)などは、終止形重複形にならないことになる。しかし、そのような例は確かに多くはないが、古代において皆無というわけではない。

上代では主体変化動詞と見られる「瘦ス」「ヌル(抜)」の終止形重複形「ヤスヤス」「ヌルヌル」の例がある。

④ 瘦も生けらばあらむをはたやはた鰻を捕ると川に流るな
(万葉集 三八五四)

⑤ 入間道の大屋が原のいはるつら引かばぬるぬる(奴流々)
我にな絶えそね
(万葉集 三三七八)

④の「ヤスヤス」は「結果状態」であろう。「瘦す」という変化の結果としてそうある状態が持続し、それと後続の「生」きることが、並行しているわけである。

⑤は、これと地名が異なり「いはるつら」が「たはみづら」になっているだけの類歌(三五〇一)もあるが、いずれにしても「ヌ

ル」を「抜ける」の意の主体変化動詞と考えろと、「ヌルヌル」は「反復」の意であると思われそうである。「いはるつら」を一度引くと、何度もズルズル抜けてくる——蔓性の植物で、その蔓の何箇所にも根が生えているようなものならば、一度引くと何本もの根が次々と抜けることもあるだろう——という解釈である。すなわち

A 引く「一回」——ぬる「反復」
ということになる。

だが、もう一つの取り方として、「引くと抜け、また引くと更に抜け」というように、「引く」と「抜ける」という一連の動きが反復する、という解釈も有り得ないだろうか。これは

B 引く——ぬる「以上の一連の動きが反復」
ということになる。

仮にそのような意味だとすると、「ヒカバヌルヌル」という形ではなく、「ヒカバヌル ヒカバヌル」という形が期待されるところだが、時代を遡ると、意味の上ではBのタイプで、 V_1 (この例では「引く」と V_2 (同じく「ぬる」)の二つの動詞によって表される一連の動きの反復を表しているのに、形の上では「 V_1 テ(ハ) V_2 V_2 」「 V_1 バ V_2 V_2 」のように二つ目の動詞だけが重複した形になっている例が散見される⁽⁴⁾。この例の場合歌であるため、「ヒカバヌル ヒカバヌル」という形は音数律の制約上取り得ないことも考えるべきであろう。

蔓草を引く意だけで考えると、A・Bどちらのタイプの意味に取ることもできるように思われるが、この歌には表面上の意味だけでなく、「引く」には「(相手の女性を)誘う」、「ぬる」は「靡き寄る」又は「寝る」の意が込められており、そちらの意味で考えた場合、「誘つたら寝、また誘つたら寝」という一連の動きが反復する、Bタイプの解釈の方に分があるように思われる⁽⁵⁾。

以上のように、⑤の例は右のBタイプの表現である可能性にも考慮が必要と考えられ、その場合、本稿でいう動詞重複形からは除かれることになるが、Aタイプの表現と見て動詞重複形に含めるとすれば、その場合の意味は「反復」ということになる。

中古（院政期を含む）における、主体変化動詞の終止形重複形かと思われる例としては、「シルシル」（伊勢1 平中1 後撰3 宇津保1 蜻蛉2 拾遺2 源氏1 後拾遺1 浜松1 金葉1）と「ユガムユガム」（古本説話集1）が挙げられる。

この中で「シルシル」の「知る」は、「心理動詞」等として処理したり、「頭脳の中に存在しなかった事物を存在に変える」（森田（一九七七））という主体動作・客体変化を表す他動詞として扱うことも考えられる。しかしそれによって主体（の頭脳の内容）が変化するという面では、主体変化動詞的な面もあると考え、その重複形である「シルシル」を一応ここでの検討の対象としておく。

⑥「かく人づてならずうきことをしるく」、ありしながら見たてまつらむよ」（源氏物語 若菜下 一一九八③）

右の例の「うきこと」とは女三宮と柏木の密通で、この直前に源氏は柏木の手紙を発見してそのことを知ったという、その「結果状態」を表す例と見られよう。

ただし「シルシル」の例の中には、「結果状態」というよりは、いつそれを知ったということには関係なく単に現在知っている状態にあるという「単純状態」的な意と思われるものもあり、その方がむしろ数は多いようである。いずれにせよ、現代では「*シリシリ」など極めて言いにくいのに比べると、目につく相違と言えよう。

「ユガムユガム」は、古本説話集・今昔物語集の同内容の説話

に見られる。

⑦寝殿、対などの有しも一つ見えず、政所屋のありし板屋なん、
ゆがむく残りたる。（古本説話集 上巻第二八 四三六⑩）
意味としては「ゆがんだ状態になったままで」という「結果状態」か、「あちこちゆがんで」という「（主体の）多数」の意味だろうが、次節で述べるように「結果状態」に分があるかとも思われる。

主体変化動詞の終止形重複形で「進行」の意に解される確かな例は見られない。「ゆくゆくのみくふ」（土佐日記 十二月二十八日 三一③）という「ユクユク（行）」がそれに該当するもののように見えもするが、この場合の「行く」は主体の位置変化を表すという面よりは、「舟を走らせながら」（日本古典文学全集）等と訳されるように、動作動詞的な性格が強いものと判断する。

終止形重複形そのものが時代を追って生産力を失っていくこともあり、主体変化動詞が終止形重複形になっている例は、⑦の例あたりが下限となるようである。後述の主体変化動詞が連用形重複形になる場合と比べると、「反復」の意の比重が少ないようにも思われるが、用例数が少なくまたその解釈に関わる問題もあるので確かなことは言えない。

ちなみに、主体変化動詞で終止形重複形になっているものは、すべて単純動詞であるが、これは主体変化動詞に限らず複合動詞は連用形重複形になる（橋本（一九五九））ためであろう。

四 主体変化動詞の連用形重複形

【中世前期まで】

続いて連用形重複形について論じていくが、蜂矢（一九九八）という「重複副詞（時空数量）」や、玉村（二九八五）にいう「生

き生き」式または「思い思い」式に分類され得るようなものは、本稿で言う連用形重複形からは除外される。また第三節で触れたBタイプの表現に該当すると思われる例も除外することとするが、それらの認定の仕方によっては、用例数などにはある程度の変動があり得る。

中世前期鎌倉時代頃までの時期においては、主体変化動詞の連用形重複形は、複合動詞ではかなり自由に作られるようであるし、単純動詞がこの形になることも、現代と比べると制約が少ないようである。

「ヌレヌレ」(濡) (源氏物語3 金葉集1 千載集1)、
「クモリクモリ」(曇) (和泉式部日記1)、
「オコリオコリ」(起) ス (栄花物語1)、
「コボレコボレ」(壊) (古本説話集1)、
「コボレコボレ」(零) (沙石集2)、
「ツヅマリツヅマリ」(縮) ス (水鏡1)、
「ナリナリ」(成) ス (宇治拾遺1)、
「アマリアマリ」(余) ス (愚管抄1)、
「ヤミヤミ」(止) ス (愚管抄1)、
「ウツリウツリ」(移) ス (愚管抄1)

現代では「*クモリクモリ」や「*コボレコボレ」に対応する「*コワレコワレ」など極めて言いにくいと思われるが、この時期にはそのような動詞重複形が有り得たことは興味深い(時代が下るにつれて、「ス」を伴って全体として複合サ変動詞変化したものの比重が増えるといったことはあるようだが)。

「ヌレヌレ」の例のうち

⑧雪いたう降りたり。(中略)あはれなる雪のしづくにぬれく
行ひ給。(源氏物語 賢木 三六四⑭)

といった例は、人が雨や雪にさらされ続ける意のものであるが、この種のものについては、金水(一九九五)に、

「雨に一時間濡れた」などと言えるとすれば、非限界的な動

作動詞と見なせないことはないであろう。むしろ、「髪が濡れている」のような用法は限界的な変化動詞である。

とされている、典型的な主体変化動詞とは異なるところがあると見られるから、これらは主体変化動詞の重複形の例からは除外して考えるべきかも知れない。

だが同じ「ヌレヌレ」でも

⑨宮狩の御衣にいたうやつれて、ぬれく入りたまへるなりけり。(源氏物語 総角 一六六④)

は、句宮が宇治に到着した時の状態を述べたものだから、主体変化動詞による「結果状態」寄りで見られよう。

「ヌレヌレ」以外で「結果状態」の意に解される可能性があるのは、次の「コボレコボレ」の例くらいである。

⑩五条に急ぎ行きて見れば、築地こぼれくもありしに、多くは小家居にけり。(古本説話集 上巻第二八 四三六⑭)

この例は「(築地が)こわれたままで」ということと見れば、「結果状態」の例になる。「あちこちがこわれて」という「多数」の意ともとられそうだが、同内容の説話である今昔物語集卷十九第五では「顔乍モ」となっているところからすると、「結果状態」に分があるかと思われる(であれば接近した文脈で使われている前掲⑦の例にも同じことが言えようか)。

連用形重複形で「結果状態」の意に解される可能性がありそうなのは、右の⑩の例くらいまでで、以降は(複合動詞の重複したもののも含めて)

⑪人ノ命ノ八万歳アリシガ、百年ト云ニ一年ノ命ノツヅマリくシテ十歳ニナルヲ一ノ小劫トハ申也。(水鏡 序 七④)

⑫源氏のつは物どもこれを事ともせず、甲のしころをかたむけ、平家の舟にのりうつりく、おめきさけんでせめたたかふ。

(覚一本平家物語 卷十 下二九六③)

のように、ほぼ「反復」「多数」に解されるものに限られてくるようである。

前節で述べたことと合わせると、終止形重複形にせよ、連用形重複形にせよ、「結果状態」の意らしき例が見られるのは院政期頃までということになるが、その要因としては「ナガラ」「ツツ」等との関連も考えられるかも知れない。また終止形重複の場合と同様「進行」の意のものは見られない。¹⁰⁾

【中世後期以降】

中世後期以降においても、複合動詞は依然として生産性を保っているようで（それが中古や中世前期頃までと等質かどうかはさらに検討を要しようが）、近世に限っても

「カケイリカケイリ（駆入）」（出世景清¹）、「キエイリキエイリ（消入）」（用明天王職人鑑¹）、「ワキイデワキイデ（湧出）」（けいせい反魂香¹）、「コギイデコギイデ（漕出）」（博多小女郎波枕¹）、「スリヌケスリヌケ（擦抜）」（膝栗毛¹）、「イリカワリイリカワリ（入替）」（八笑人¹）が確認できる。意味はいずれも「反復」「多数」と解される。

これに対して単純動詞の例は、中世後期頃には見いだしにくくなってくるようで蜂矢（一九九八）の表を見てもこの時期の確かな例は見つからない。しかし抄物では（調査や検討が不十分で、各資料の用例数も挙げられない段階での見通しではあるが）

⑬又死／＼百度スル事はナケレ共（毛詩抄 卷六 三三ウ①）

のような単純動詞の例も、ある程度存在するようである。右の⑬の例はやはり「反復」に解されるが、この「シニシニ（スル）」は現代では極めて考えにくい例で、玉村（一九七四）は「反復の許されない動詞の意味に起因している」とするものの、このような例が存在したことからすると、理由はそれだけではないと考え

られよう。

近世になると、単純動詞の例はさらに見いだしにくくなるようだが、広坂直子（一九九九）に掲げられている、洒落本「新月花余情」の「手ぬぐひのほうかぶりとり／＼」という例は、「進行」の意で、強進行態の例かと思われるが、これが例えば主体変化・主体動作の両方に関わる再帰的動詞は、重複形で強進行態を表すことが比較的しやすいということなのかは、更に考えたい。他には現在まで調べた限りでは

⑭風にきえ／＼。嵐にちり／＼塵積もつて山姥となれる。

（近松浄瑠璃 姫山姥 第四 下二二⑤）
という例がそれかと思われる程度である（この例は道行におけるものなので、リズム・口調を整える修辭的なリフレインである可能性にも配慮すべきであろうが）。概して近世においては、主体変化動詞が重複形をとることが、複合動詞ではともかく、単純動詞ではかなり稀という（たぶん現代と近い）状況になっていると言えそうである。

なお右⑭の例も、連用形重複形だとすれば「反復」か「多数」の意と思われる、従って「進行」の意の例は、中世後期・近世を通じて、前掲の「新月下余情」の例がそれと認められる程度ということになる。

五 まとめと見直し

ここまでの一応のまとめとして、次のことが挙げられる。

○主体変化動詞の重複形は、現代と比べて古い時代の方が制約が少なく、単純動詞でもこの形を取り易かったようだが、近世には既にかなり制約が強くなっている。

○主体変化動詞の重複形には、院政期頃までは「結果状態」の

意のものもあつたが、それ以降見られなくなる。

○主体変化動詞の重複形は、各時代を通じて、「進行」の意を表す例が非常に稀なようである。

第一点・第二点に関しては、主体変化動詞の重複形へのなりやすさ・なりにくさ、重複形になった場合の意味に、時代的な相違の存在が認められたことになる。

第三点に関連することとして、金水(一九九五)では、運動が必然的に尽きる内的な時間的限界を有する「限界動詞」のつくる進行態を「強進行態」、「非限界動詞」のつくる進行態を「弱進行態」と呼んでいるが、「限界動詞」に当たるのは、主体変化動詞と、主体動作・客体変化他動詞である。この中の主体変化動詞に関しては、これが重複形をとって「強進行態」を表すことには非常に強い制約がありそうだということになる。

すると次の問題として、主体動作・客体変化他動詞の重複形は「強進行態」を表し得るかが、知りたく思われるところである。これに該当するもの、特に連用形重複形は各時代を通して用例数が多いこともあり、現段階では調査・検討が不十分なために確かなことはいえないが、「反復」「多数」の意に解されるものが多いように思う。

もし主体動作・客体変化他動詞の重複形に「進行」の意が認められなかったり、強い制約があつたりするようであると、前の節までで述べた主体変化動詞の場合とあわせて、動詞重複形は各時代を通じて「限界動詞」による「強進行態」を表しにくいということになる。そのようなことがあるとすれば、動詞重複形がアスペクト表現の中で担う役割を考える上でも興味深い問題になると思われるが、この点については更なる検討が必要である。

なお、国立国語研究所(一九八九)の第41図によると、現代でも終止形重複形が生産力を有している地域や、連用形重複形を共

通語よりも多用する地域があるようで、本稿で論じたような問題点がそれらの方言ではどうなっているのかも、知りたく思われるところである。

(注)

(1) 金水(一九九五)では、「限界動詞であっても多回的動作として見ると、アスペクト的には非限界動詞としての性質を持つ」とされておられ、それに従うと「反復」の意のものは「強進行態」とは言えないことになる。

(2) 「まだ起き起きの禿共」(近松浄瑠璃 けいせい返魂香中之巻 下一四五④)「帰り帰り宿で申しますには」(八笑人三編上 上一八〇⑦)も「直後」の意に解され、②の「デエデエ」と同類かと思われる。また、「萩の花くれくれまでもありつるが」(金槐集 一一〇)は「暮れる直前」ということで、③のような「直前」の意かと見られる。

(3) 「しぬく」ときくきくだにも逢ひ見ねば命をいつの世にか残さむ(七〇七)という例で、「いたづらにたびたびしぬといふめれば逢ふには何をかへむとすらん」という歌(源さねあきら「たのむことなくは死ぬべし」と言へりければ」という詞書を持つ)への返歌である。同類の例として「源宰相臥し沈みて、しぬく」と天の下に惜しまれつつ(宇津保 祭の使 四五⑥)が挙げられる。

(4) 近藤明(一九八八)(一九八九)参照。

(5) Bタイプのものであれば、主体動詞変化も(たぶん各時代を通じて)かなり自由になり得る。現代語の例としては「痩せては太り痩せては太り」「曇っては晴れ曇っては晴れ」など。なおBタイプに属するものは、「後続の動詞」を必ずしも要求しない(「コロセバ来くる」[沙石集 三〇〇⑩]のような例

がある)等の点においても、本稿でいう動詞重複形である「ナクナク」「ナキナキ」の類とは異質なところが認められると思う。

- (6) ⑤の例を連用形重複と認めた場合、後続の動詞が「な絶えそね」という禁止形だということになる。現代語では動詞重複形に後続する動詞が禁止形である場合、「ものを食い食い歩^くな」のように、禁止の意味が動詞重複形にまで及ぶが、⑤の例においては禁止の意味は「ヌルヌル」には及んでおらず、その点で現代とは異なることになる。

- (7) 新しい時代の例として「ここに詣づる人は忘る^くも流れの清きに愛でて手に掬びつらんとよませ給ふにやあらんを(雨月物語 卷三 仏法僧 八三⑤)」というものがあつて、「結果状態」の意か「多数」の意と解されるが、擬古的な文章の中でのものである。

- (8) 接近した文脈で使われていながら、「コボレコボレ」が連用形重複形で、「ユガムユガム」が終止形重複形であるのは、連用形重複形は「非四段活用」に(中略)早く例が見られる(玉村一九七四)ことと関係があるうか。なお沙石集の「コボレコボレ」は、「零れ零れ」(この場合「反復」の意味で使われたものであるが、その説話ではそれが「壊れ壊れ」を連想させて縁起が悪いという話しになっており、「壊れ壊れ」の意の「コボレコボレ」も有り得たことが想像される。ただし用例の性質上、「結果状態」の意なのか「多数」の意なのか、特定はできない。

- (9) 他に「月はくもりく、しづるるほどなり」(和泉式日記四二二⑭)の「クモリクモリ」が「結果状態」に取れなくもないが、「しづれ」の降り方から考えると「反復」の意と見るのが妥当と思われる。

- (10) 「ユキユキテ(行)」「ツモリツモリテ(積)」のように、連

用形の重なった後に「テ」を伴うものは、また事情が異なりそうであるが、本稿でいう連用形重複形には、この種のものはない。

【参考文献】

- 安部清哉(一九九七a)「古代日本語の動詞重複形 (reduplication) 二種の語法と方言分布及びその言語類型地理論的問題(一)」『日本語の歴史地理構造』(加藤正信編) 明治書院
- 安部清哉(一九九七b)「動作の併行表現の歴史上代——動詞終止形重複形・動詞連用形重複形——」『日本語文法体系と方法』(川端善明・仁田義雄編) ひつじ書房
- 大鹿薫久(一九八二)「知る」のアスペクトと意味」『語文叢誌 田中裕先生御退職記念論集』田中裕先生の御退職を記念する会
- 金水 敏(一九九五)「いわゆる『進行態』について」『築島裕博士古稀記念国語学論集』汲古書院
- 工藤真由美(一九九五)「アスペクト・テンス体系とテキスト——現代日本語の時間表現——」ひつじ書房
- 国立国語研究所(一九八九)『方言文法全国地図1』大蔵省印刷局
- 此島正年(一九七五)「動詞の疊語」『湘南文学』九
- 近藤 明(一九八八)「動詞重複型継起反復表現の重複範囲——「ひ」とつむすびではゆひく」等の読み方——」『梅花短期大学研究紀要』三六
- 近藤明(一九八九)「中世後期口語資料・近世における動詞重複型継起反復表現——「同じ所へ行つては帰り行つては帰り」等——」『梅花短期大学研究紀要』三七
- 高橋太郎(一九八五)『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』秀英出版
- 玉村文郎(一九七四)「連用修飾句ナクナクについての覚え書き」『同志社国文学』九

玉村文郎(一九八五)『日本語教育指導参考書13 語彙の研究と教育

(下)』大蔵省印刷局

橋本四郎(一九五九)『動詞の重複形』『国語国文』二八—八

峰矢真郷(一九九八)『国語重複語の語構成論的研究』塙書房

日野資純(一九九六)『古典解釈のための基礎語研究』東苑社

広坂直子(一九九九)『近世後期の並起表現——反復形式からナガラ

形式へ——』『平成九年度—平成十年度科学研究費補助金基

盤研究C(1) 研究成果報告書 明治時代の上方語における

テンス・アスペクト形式——落語資料を中心として——』(研

究代表者 金沢裕之)

森田良行(一九七七)『基礎日本語1』角川書店

〔資料〕(用例を引用または用例の存在に言及したもののみ。カッコ

内に注記のないものは日本古典文学大系による)

万葉集(日本古典文学全集) 八代集(新日本古典文学大系) 金槐

集 土左日記 平中物語 宇津保物語(宇津保物語本文と索引) 蜻

蛉日記(新日本古典文学大系) 源氏物語(源氏物語大成) 和泉式

部日記 栄花物語 浜松中納言物語 今昔物語集 古本説話集(新日

本古典文学大系) 水鏡(新訂増補国史大系) 宇治拾遺物語 愚管

抄 沙石集 覚一本平家物語 毛詩抄(抄物資料集成) 近松浄瑠璃

〔出世景清・用明天王職人鑑・けいせい反魂香・姫山姥・博多小女郎

波枕〕 雨月物語 東海道中膝栗毛 花暦八笑人(講談社文庫)

〔初校時付記〕

用例⑦の「ユガムユガム」の連用形重複形に相当する「ユガミユガミ」の例として、後奈良院宸翰本「なそたて」に「にがミくゆがミく」という例があるのに気づいた(岩波文庫『中世なぞなぞ集』p三〇)。中世後期の単純動詞の例——意味は「反復」または「結果状態」か——ということになりそうだが、いろは歌にかけた謎(「に」

の「は」「は」「ゆ」の上が「き」で、答は「ははきき」のため、多少無理な言い方をしている可能性もあり得よう。